

■近況レポート

国内金相場は高水準での動きが長期化

五千円中心の値動きが長期化

昨年の四月号にて金・銀相場の動向に触れたが、一年を経過して大きな動きは見られていない。貴金属地金相場の価格バランスなどには変化が出ている。加えて業界内で気が付いたことなど書かせて頂いた。

■国内金相場は一年ぶりの高値

国内金・銀相場グラフは税込の小売価格をデータとしている。グラフ②以降は二〇〇六年から約一三年間の動きを示しているが、ここ六年程の金相場推移をグラフ①に示してみた。国内金価格が初めて一グラム五千円に乗せたのが二〇一三年初め、NY金相場がピークアウトしていたが二〇一

二〇一二年の歴史的な円高が一転円安に向かったことがその要因であった。NY金相場は二〇一五年いっぱい調整安を続けるが、国内金相場は二〇一五年にかけての更なる円安で比較的高値を維持した。二〇一三年は五千円の大台に乗せ、一時五、三〇〇円台に達した。円安も一服したことでNY相場の下落を受け六月には四千円に肉薄する場面も見られた。この年の高値は四月の五、三三八円、安値は六月の四、〇四四円、高低差は一、二九四円と一九八一年以来の大幅なものとなった。

二〇一四年は反発して始まった後、一月から再び騰勢を強め翌二〇一五年一月には五、三八三円の高値を付けた。この価格は二〇一三年四月の高値を上回ったが、二〇一四年四月に消費税が五%から八%に引き上げられた為で、税抜価格では二〇一三年の高値を抜いていない。二〇一五年は一月の高値から二〇一六年の一月までの一年で九一二円の下落となった。その後は上下動を経て二〇一八年一月まで七四〇円程の上昇となった。二〇一八年は一月の高値から八月の安値まで六七〇円の反落、しかしその後はジリジリ上昇して今年の二月二二日には五、一七六円と昨年一月以来の高値水準を回復した。

グラフ①の値動きの概略を示したが、実質的には二〇一三年の高低値間での値動きに終始している。ここ四年程では五千円を越えれば売られ、逆に四千五百円に近づくと買われる展開で、上下に抵抗ラインと支持ラインが出来ている。保合相場（ボックス相場）になつてみるとみられるが、上下動がだんだん小さくなりそしてこの期間が長期化するとエネルギーが溜まり、いつかこのボックスを離れる時に大きな動きに繋がることがある。

■国内銀相場は依然下落基調

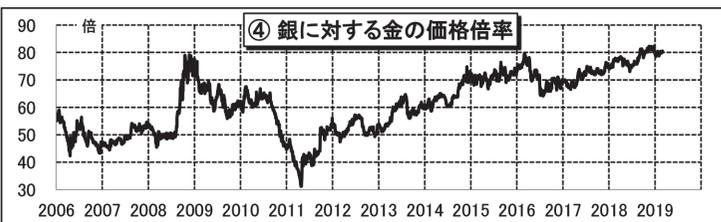
国内銀相場は二〇一六年の反発で下げトレンドに終止符が打たれたかに見えたが、昨年後半には二〇一〇年以来八年ぶりの安値に沈んだ。金と銀との価格バランスはグラフ④に示したが、最近では金は銀のほぼ七〇倍の水準であり、二〇一一年以降は金に対する銀の価値が下がっていることを示している。銀は投機的な動きが過去にあったのは知られているが、短期間で大幅に上昇した後の反動安は大きくそして長期間にわたることになる。底這いという言葉があるが、相場の動きが小さくなりさらに安値圏で長期化することも

最近6年余りの国内金相場の推移



2006年以降の国内金・銀価格推移と金銀比価

グラフは2019年3月1日まで



有りうる状況かもしれない。さまざまな銀製品が大量にあり、相場が上昇するとこれらのものが溶かされ供給過剰になる。金銀比価はかなり銀安に振れてはいるが、このあたりの水準が妥当な評価なのかもしれない。

コイン業界でも、レアモノは別だが銀相場に連動するコイン類は二〇一〇年から翌年春にかけての急騰を受け、昭和の百円銀貨などは額面を上回り二〇一一年には二〇〇円を越えた取引もあつたが、最近では業者間の大口径取引で一枚一二〇円程度と額面に接近している。近代銀貨類並年物も状態が悪ければ素材価値で取引きされ、外国銀貨もこの傾向が強いものが多く存在している。

海外相場の最近の動向

次頁掲載のグラフ⑤はNY銀相場、⑥は金相場に原油相場を併記したもの、⑦以降は為替相場、参考にNY株価指数を紹介した。

この一年の海外貴金属相場は特に大きな動きはないが、プラチナ相場がジリ安傾向で金との価格差が拡大していること、パラジウム

が昨年前半にプラチナを上回り最近では金相場も上回っているなど、価格バランスが異なってきたのが特徴。三月一日現在のNY貴金属相場は金を一〇〇とすると、パラジウムが一一六、プラチナが六六、銀が一二となっている。

NY金相場は二〇一一年八月の一、八九一ドルから二〇一五年二月の一、〇五九ドルまで八三二ド